

英語でレシピを作成し、英語を使って調理実習 実践的な学びで、英語に強い教員を養成

小中連携も見据えた 英語の授業を考案

10月26日、人間科学部現代子ども学科の小学校・中学校英語教員養成コースの学生たちが英語による調理実習を行いました。「ホームステイ先のホストファミリーに日本食を伝える」をテーマに、各グループに分かれてお好み焼きを調理。事前に学生たちが英語のレシピを準備し、当日はアメリカ人教員のアンドラス・モルナー講師や、加藤純子講師の英語による指導のもと、学生たち自身も英会話を交えながら楽しく実習を行いました。

これは英語の科目を担当する小田節子先生、イギリス人教員のポール・ロジャース講師とモルナー講師、加藤講師の4名によって考案された授業。「お互いに密な連携を取りながら、さまざまな内容で展開しています」と話す小田先生。「2020年には小学校の英語が正式な教科になる予定です。それに向けて、本学の強みを活かしつつ“英語に強い教員”の育成をめざしています」と話します。また、今後さらに強化される小中連携についてもふれ、「小学校での英語だけではなく、中学校も通じて9年間の英語教育を把握できる教員になってほしいと思っています」ともいわれます。



英語による調理実習を行う現代子ども学科の学生たち

プレゼンの能力や 授業の企画力も育成

調理実習の他にも、小田先生をはじめとする先生方が考案した授業はさまざまな内容で展開されています。その中の一つ、ストーリーテリングの授業では、学生が日本の昔話を英語で話せるように練習します。「小学生の英語教育では、英語の音になじませることが大切。英語でも感情を込めて話せるように練習します」と小田先生は話し、「外国人の子どもに通じるように、自分たちで物語を少し作り変えたりと工夫を行う過程で、より深く文法を理解できるようになると思います」といいます。学生たちは教育研修で訪れるアメリカの小学校で、実際にその成果を発表。子どもたちが食い入るように話を聞く様子に感動し、「英語が通じる喜びと達成感」を体感することができます。

また守山区立図書館をはじめ、名古屋市内3ヶ所の図書館で、英語によるお話し会も行っています。本の読み聞かせや歌など、プログラムはすべて学生が考え、リハーサルを何度も行い本番に挑みます。回を重ねるごとに、学生たちの読み聞かせも上達。その様子に小田先生は「人前でも緊張することなくプレゼンできる能力が自然に



金城学院大学
人間科学部 現代子ども学科
小田 節子 教授

「日本人への英語発音教授法の開発」「早期英語教育」が研究テーマ。専門分野は教育学と言語学。日本実践英語音声学会評議員。

身につくと思います。また自分たちでプログラムを考えるという実践は、小学校の授業内容を考えるときに役立ちます」と話します。「今後は英語教育全体もCLIL(内容言語統合型教育)を推進されていきます。それに合わせて、現代子ども学科でも積極的に調理実習やストーリーテリングなどを取り入れて内容と英語を結びつける授業を行っていきます。これにより、自信を持って子どもに英語を教えられる教員になってほしいと考えています」。

現代子ども学科では、2019年度より「現代子ども教育学科」へと学科名を変更します。これまで同様、こうした実践的な授業を行いながら、より一層即戦力として応えられる、また学ぶ楽しさを子どもたちにきちんと伝えることができる小学校教員や中学校教員を養成していきます。

金城学院大学 公式SNSのご紹介

金城学院大学では、大学公式Instagram・Facebookにて、大学の毎日の様子や、教員・学生の活動を紹介しています。ぜひご覧ください、フォローをお願いいたします!



金城学院大学公式 Instagram

kinjogakuin_university



金城学院大学公式 Facebook

kinjo.univ.

実体験を大切にした“食育”を通して 野菜や果物の本物のおいしさを実感

梅干しになる過程を 身近で体験

幼稚園の園庭にはブルーベリーやみかん、梅や柿などさまざまな木が植えられており、プランターではトマトやナス、ピーマン、ゴーヤなどの季節の野菜を育てています。自然に囲まれながら、季節の移ろいや食物の成長を身近で感じられることは、幸せなことです。

6月上旬、園庭にある梅の木にたくさんの梅が実ったので、子どもたちと一緒に収穫をし、梅干作りをしました。しその葉を一枚一枚ちぎって、しっかり揉んで絞って。塩と赤ジソだけで漬けたすっぱい梅干を作りました。梅としが入っている瓶のおいしさに「うわ～すっぱいにおいがする～」「よだれがでるね」と子どもたちも驚いた様子。中には、売られている物しか見たことがなく“梅干は赤いもの”と思っている子どもも多く、漬ける前の梅を見て「これ本当にうめほしになるの？赤くないよ？」と聞いてくる子どももいました。

梅雨が明けた7月上旬、大きなざるの上に梅干を並べ“土用干し”をしました。子どもたちは瓶を開けた瞬間に漂った酸っぱい香りを体験したり、梅を一粒一粒瓶から出して干す様子を見たり、梅干しになる過程を身近で体験することができました。

2学期になり、完成した梅干しを給食の時にみんなで美味しくいただきました。「ん～すっぱい！」「ごはんといっしょにたべるとおいしいね！」と、自分たちで作った梅干しの酸っぱさと美味しさを感じながら、それぞれに味わって食べました。



苦味も形も初体験！ ゴーヤの収穫体験

園庭のプランターで育てていたゴーヤもた

くさん実りました。子どもたちと収穫を行い、種やワタを取り、スライサーで薄くスライスしたゴーヤを塩もみして、醤油と鰹節をかけていただきました。この日はじめてゴーヤにふれる子どもたちや、はじめてゴーヤを食べる子どもたちも多かった模様。ゴーヤにふれ、表面の感触を手で感じたり、種やワタがあることや少し苦みがあることを知ったりと子どもたちにとってははじめてのことづくしです。中には、種やワタを取るのに力が必要なことや、難しいスライサーの使用方法に「お料理するのってたいへんだね～!!」「ほんと！しらなかった！」と感想をいう子どもも。自分で作ってみることで、毎日ご飯を作ってもらったことの有り難さも感じる事ができたようです。また、予想以上に「おいしい!!もったべたい!!」という声が多く、職員もみな驚きました。



みんなで収穫、皮むきも 渋柿づくり体験

秋が深まり、運動会を終えたころ、園庭にたくさんの柿が実ります。子どもたちから「柿がたくさんできていますよ！」「食べたいな～」という声が聞かれたので、みんなで柿の収穫をしました。1人が枝切りばさみを使い、枝をチョキン！もう1人がザルをもって落ちてきた柿をキャッチします。「切るよ～！いい～？」「ここでいい？」「もうすこし横かな！」こんな会話をしながら、心と力を合わせ、柿の収穫を楽しみました。また、柿の木の下にあるたくさんの柿の種や、切った枝に大きなカマキリを見つけるなど、収穫をしている間に、さまざまな発見もありみんな大喜びでした。

収穫した柿の中には渋柿があり、干し柿作りにも挑戦。子どもたちは、ピーラーを使って柿の皮むきを体験しました。初めて経験する子どもたちは、皮をむくのに少し苦戦して



いましたが、段々とコツを掴みうまく剥けるように。中には、お家でたくさん経験しているのだからと思う程、手つきが慣れている子どももいました。干してある柿を見て「これってどうなるの？」「もう食べられるの？」とみんな興味津々です。「しばらく太陽の光にあてて、外に干しておくことで甘くなって食べられるようになるんだよ」という話を先生から聞き、毎日干し柿の様子を見ながら、柿が小さくなっていく様子や、食べられるようになるのはいつなのかと、心待ちにしています。

現代の子どもたちが野菜や果物を目にするのは、スーパーなどの店に売っている物や、調理されたあとの物がほとんどです。本来の姿かたち、どのような場所でどのように実るのか、という事を知る機会が少ないと感じます。また、幼稚園で食べる給食でも「これなあに？」「食べたことないから食べられない！」と口にする前から食べることを拒んだり、食の偏りがある子どもたちが増えてきているようにも思います。食材のことについて子ども自身も知ること、また、実際に自分で育てて成長の過程を見守り、料理をし、友達と一緒に食べたりするというような実体験を通じた“食育”が、子どもたちの“食への興味”に繋がっていくと実感しています。

幼稚園での経験を通して、子どもたちが神様から与えられている恵みに気づき感謝をすること、さらに“食”について興味を持ち、“知りたいな”“食べてみたいな”と思うきっかけになればと願っています。



東京国際合唱コンクールで金賞の栄冠に! 金城学院グリークラブが中高合同で出場

中・高が合同練習 お互いに刺激や学びも

金城学院グリークラブが、7月28日(土)に行われた「第一回東京国際合唱コンクール本選」に出場し、金賞と同声部門2位に輝きました。

本大会は今年初めて開催され、中国や韓国、香港などのアジア諸国をはじめ世界各国の国々が参加。同声部門や混声、ユースやジュニアなどさまざまな部門に分かれて選考が行われました。まずは録音審査による予選が行われ、見事通過。第一生命ホールで行われた本選で演奏を行いました。

今回、演奏したのは高校生30人、中学生24人の計54人。生徒たちは4月から週5日の練習。本番1週間前は夏休みだったこともあり、朝から夕方まで練習をしました。中・高合同の練習に、「長期間一緒に練習を

することは少ないので、後輩たちと自分の中学のころの話で盛り上がって楽しかったです。指導は大変でしたが、みんな一生懸命頑張ってくれたと思います」と話す高校3年の中保里梨さん。中学3年の小川紗季さんも「高校生の演奏は歌に感情と迫力があり、とても勉強になりました。コンクールで足手まといにならないように練習しました」と話し、お互いに刺激や学びがあったと振り返ります。



左から小川紗季さん(中学3年生)、中保里梨さん(高校3年生)、宮木令子先生

楽しい雰囲気の中で 練習成果を100%発揮

コンクール前日は青山学院大学の礼拝堂で練習。「貴重な経験をさせていただきました」と中保さん。小川さんも「東京に来た高揚感と緊張感がありましたが、大学で練習できて楽しかったです」といいます。

いよいよ本番では、課題曲である「あか

あかや」の他に「春は来ぬ」など3曲の自由曲を演奏。「みんな、コンクールの雰囲気になじめることなくのびのびと歌っていました。自分たちの音楽ができたと思います」と指導された宮木令子先生は絶賛。小川さんも「無我夢中で歌いました。練習の成果が100%発揮できました」と力を出し切れた喜びを話します。

本大会は通常のコンクールとは違い、演奏がよければスタンディングオベーションも起こり、会場全体でコンクールを盛り上げる雰囲気のある大会です。生徒たちも会場からの拍手の嵐に感動を覚えました。

金賞受賞の知らせを受けた瞬間はみんなで大喜び。「教えてくださった先生方や支えてくれた皆さんのおかげだと感謝しています」と中保さん。小川さんも「他の上位チームのレベルがすごく高かっただけに、金賞が受賞できて本当に嬉しかったです」と笑顔で話します。

「中・高の団結力が高まったのでメサイアや定期公演、演奏旅行も頑張りたい」と話

す中保さんに続き、「直すべきところは直して今後のイベントもきちんと演奏したい」と小川さん。さらに上をめざして今後も頑張っていきます。



テニス部が全国中学生テニス大会出場 選手も応援も一致団結して出場権獲得

県大会と東海大会で好成績 全国大会への切符つかむ

中学テニス部が8月に広島で行われた「第45回全国中学生テニス大会」に出場しました。公立中学校を含めた全国の中学生が出場する最大の大会で、夏の大会の参加は第40回大会以来5年ぶりの快挙です。

5月の県大会では見事準優勝。6月の東



海大会で3位に輝き、全国への切符を手に入れました。特に全国大会出場を決めた東海大会では、チームのエースがあと1ゲームで負けてしまうところまで追い込まれながらも、挽回して逆転勝利を収めました。劇的な展開に本人も「みんなの応援があったから頑張れました」と話し、チームは歓喜に沸きました。

顧問の大見映理先生は「応援団と一体になって戦いました。テニス部はミスしてもリードされても明るく元気に、をモットーにしています。生徒たちも高校生と一緒にレベルの高い練習をこなし、自信を持って戦いました。全国大会では惜しくも1回戦で負けてしまいましたが、明るく元気に戦えたと思います」と生徒たちを讃えます。また「中・高が一緒に練習することも多く、進路の決まって



いる高校3年生が1年生を指導してくれることもあります。中学生にとって身近に憧れや目標となる先輩がいることはとてもよいことです。教えてもらった中学生が高校生となり、また後輩の中学生を教える。こうした成長が見られることは顧問の楽しみでもあります」とも話します。中高テニス部は今年、創部70年。これからも伝統を受け継いでいきます。

全国ディベート選手権、中学生が3位に輝く プレッシャーはねのけた3・1年混合チーム

先生、仲間感謝 次も「全国目指す」

中学校と高校の生徒が8月に立教大学で行われた第23回全国中学・高校ディベート選手権(ディベート甲子園)に出場。中学生が中学の部3位の成績を収めました。

ディベートの試合は、設定された論題に対して肯定側・否定側の選手と、勝敗を決めるジャッジからなり、議論を通じてジャッジを説得した方が勝ちとなります。論題は2月に発表され、どちらが肯定・否定の立場になるかは試合直前に決められました。

3位に輝き、リーダーを務めた3年の江坂萌夏さんは「チームの私以外はほとんど初めてだったのに入賞できて驚きました。このメンバーが集まったことも奇跡だと思います」と話し、同じく3年の伊藤志歩さんも



「ここまで引っ張ってくれたリーダーや教えてくださった先生に感謝しています。準決勝で負けてしまったときは本当に悔しかったです」と振り返り、伊藤花恩さんは「初めてのディベートでプレッシャーは大きかったです。全国出場が決まったときは嬉しさと同時に、自分で大丈夫かな?という気持ちもありました。でも周りの方々のおかげで3位になれてうれしいです」と話しました。

また1年の西尾結香さんは「準決勝で負けてしまったことは悔しかったのですが、

初心者が多いチームなのにここまでこれたことはすごいと思います」と喜びを表現。同じく1年の吉村結菜さんは「ジャッジの人から試合後にアドバイスをいただき、はじめはその言葉に心が折れていましたが、今振り返ると、とても鍛えられたと思います」と自身の成長を実感しています。

後輩に向け「来年も全国出場して1位を狙ってほしいです」と話す江坂さんの期待に応え、チームで力を合わせて来年も上位入賞を狙います。

